

2015年10月10日

香港における日本食品市場動向

愛知県上海産業情報センター
安田 龍

1 香港の概況

2014年における香港の人口は726万4,100人で、近年は毎年増加傾向にあります。この要因として、2014年における合計特殊出生率が1.24と改善していること、中国本土からの移民が増加していることが挙げられます。一方で、香港人の平均寿命は世界トップ水準にあり、日本と同じく少子高齢化が進んでいます。2014年の実質GDP成長率は2.3%で、ここ3年は2%前後で推移しています。

また、2014年の香港への訪問者数は約6,084万人で前年比12%増、このうち中国本土からの訪問者数は約4,724万人で前年比16%増、全体の約77.7%を占めており、中国本土からの訪問者が香港経済にも大きな影響を与えていることが伺えます。

2014年の香港における食料品輸入額は約1,851億香港ドルで、10年前の2005年の約602億香港ドルと比べると約3倍に成長しています。香港の国別食品輸入では、日本は中国、アメリカ、ブラジル、オランダ、タイに次いで6位となっており、日本からは香港が農林水産物・食品の最大の輸出先となっています。

【出所：香港統計局】

2 香港における日本食品市場

愛知県は、製造品出荷額が昭和52年以降全国第1位であり、自動車や機械などの製造業が盛んなイメージが強いですが、一方で2014年の農業産出額は全国第7位と全国有数の農業県でもあります。

今回、ジェトロ香港や香港のスーパーをいくつか訪問し、香港における日本食品市場、特に農産品を中心に調査した結果を報告します。

香港の食品小売業はwellcomeとPARKnSHOPの2社が圧倒的なシェアを占めていますが、日本食品は、SOGO、APITA・UNY・PIAGO、AEON、YATA、citysuper等で多く取り扱いがされています。

中国本土では、生鮮食品の輸入がりんご、なし、米（くん蒸条件つき）、水産

物のみが可能であるのに対し、香港は基本的に生鮮食品の輸入が可能であり、香港からの再輸出も含めて、市場として期待されています。香港へ生鮮食品を輸送するに当たっては、基本的に飛行機を利用して輸送するか、もしくは船便で冷蔵コンテナを利用するかのどちらかになります。

飛行機を利用する場合は、コストが高くなってしまうため、付加価値のある果物は日本の2倍の価格になったとしても販売することができるが、野菜は付加価値があまり高くないため、販売することは難しいとのこと。結果として、日本産の野菜は、船便による輸送日数の問題から香港まで距離の近い九州産が中心に流通しているようです。

そこで、果物についてももう少し触れると、日本産では桃とイチゴが一番人気になっているとのこと。イチゴの場合は痛みやすいため、輸送時に傷みにくい平トレイに包装することが望ましいそうです。

愛知県が産出額全国1位となっているイチジクは、現在トルコ、イラン、アメリカ、メキシコ等の商品が多く流通しており、日本産はまだ流通量は少ないが、品質や味の付加価値が高いため、取扱ができれば十分に可能性はあるとのこと。ただし、収穫方法や時期によっては痛みやすいため、どのようにリスクを回避するかが重要なポイントとなるとのこと。

みかんは南アフリカ、オーストラリア、台湾等から、メロンはアメリカ、オーストラリア、ホンジュラス等から多く輸入されており、日本産のメロンは静岡産と北海道産が取り扱われていました。

加工食品の分野では、味噌やみりん等の調味料は、もともと使用する習慣がないため、使い方が分からない方が多く、使用方法を含めて提案していく必要があるとのこと。

酒類については、日本酒や果実酒は比較的人気が高いが、焼酎は酒を薄めて飲むという習慣がないため、こちらもPR方法を工夫する必要があるとのこと。

上海産業情報センターでは、今後も香港や中国本土の食品市場について、情報提供していきたいと思えます。

本資料は、参考資料として情報提供を目的に作成したものです。
上海産業情報センターは資料作成にはできる限り正確に記載するよう努力していますが、その正確性を保証するものではありません。
本情報の採否は読者の判断で行ってください。
また、万一不利益を被る事態が生じても当センター及び愛知県等は責任を負うことができませんのでご了承ください。